

## 粘り強さ

*Four-Dimensional Education: The Competencies Learners Need to Succeed* (Fadel, C., Bialik, M. and Trilling, B., 2015)の文言を借りると、「粘り強さ」は **Resilience** (逆境を跳ね返す力) と **Growth Mindset** の2語で言い換えることができるのではないかと思います。

Growth Mindsetとは、成長を志向する心構えです。これと対抗する概念が、固定化された心構えを意味するFixed Mindsetとなります。例えば、何かに挑戦しなければならないときに、mindsetによって行動が下の表のように変わります。**Growth Mindsetを持った生徒は、粘り強く取り組むことができる学習者になれる**でしょう。

Growth Mindsetを持った生徒を育てるためには、ただ頑張れと言うだけでなく、教師が授業を積極的に変える必要があります。具体的には、「やってみて、振り返り、やり直す」

サイクルを回すことで、言語運用の質を高めていくことです。振り返りで終わらずに、教師がフィードバックを与え、もう一度やり直す機会を設けることで、「前回よりできた」実感を持つことができ、学んだことを意識化するようになります。これを繰り返すことで、生徒のmindsetが変わっていくでしょう。

## 自己調整

「自己調整」については、既に多くの学校が振り返りカードを使った自己評価を取り入れています。しかし、「**できたかどうか**」を評価するものがほとんどです。これを、「**改善方法を考える振り返り**」に変えていくことが大切です。例えば、ロールプレイをした後、A役の自分とB役の自分のパフォーマンスを比較し、どちらがよかったかを考え、なぜよいパフォーマンスができたのか、次はどうすればよいかまで踏み込んだ自己評価ができるように導くことが必要になります。

Growth Mindset	Fixed Mindset
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挑戦を受け入れる</li> <li>・ 障害に対して、負けずに頑張る</li> <li>・ 批判から学ぶ</li> <li>・ 努力は「成長への道」</li> <li>・ 他者の成功は「刺激や励み」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 挑戦を避ける</li> <li>・ 障害があった場合、諦める</li> <li>・ 批判を無視する</li> <li>・ 努力は「実りのないもの」</li> <li>・ 他者の成功は「自分を脅かすもの」</li> </ul>

SSD 三省堂

三省堂 教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

■大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL 06 (6341) 2177  
 ■名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F TEL 052 (953) 9211  
 ■九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL 092 (531) 1531・1532  
 ■札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F TEL 011 (616) 8722



No.1 英語教育改革 —Now and Then— 根岸 雅史

No.2 思考力・判断力・表現力 松沢 伸二

No.3 主体的・対話的で深い学び 竹内 理

No.4 新学習指導要領施行に向けた授業改善 日臺 滋之

No.5 小中高の連携 今井 裕之



# 小中高の連携



今井 裕之 (関西大学)

中学校は、小・中・高の連携において大きな役割があるといえます。小学校からバトンをもらい、高校に渡すという、2つの役割を担っているからです。

今回は、小・中・高の連携における目標・評価・指導の3つの観点について考えてみましょう。

## 目標

学習指導要領の改訂により、育成すべき資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に再編成されました。大きな変化としては、これまでは「**主体性・多様性・協働性**」といわれていたものが、「**学びに向かう力、人間性等**」となったことが挙げられます。

「学びに向かう力、人間性等」という目標ができた経緯について、少し解説します。資質・能力の3つの柱には、Fadelらが提唱した、「4次元の教育モデル(Four-Dimensional Education)」という、知識、スキル、人間性に、メタ学習が加わった教育モデルの影響が強く出ています。「学びに向かう力、人間性等」は、このモデルを資質・能力の3つの柱に落とし込む際に、人間性とメタ学習をひとまとめにして生まれたものです。

2つの要素をひとまとめにしたことで、評価が複雑になったといえるかもしれません。

## 評価

観点別学習状況の評価観点として、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つが設定されました。また、「学びに向かう力、人間性等」には、観点別学習状況の評価になじまない部分が含まれるため、個人内評価を行う「感性、思いやりなど」という観点が含まれています。

新しい目標と評価観点を踏まえて評価を行う際の具体案は、今後国立教育政策研究所から提示される、評価に関する参考資料を待ちたいと思います。以下はあくまでも私見ですが、「知識・技能」と「思考・判断・表現」は、**段階的なCAN-DOリストをもとに、筆記テストとパフォーマンステストを実施・評価するべき**でしょう。

「主体的に学習に取り組む態度」は、他の2つの評価観点とは異なり、小・中・高で評価内容に大きな差が出ません。そのため、**共通する枠組みによる一貫した評価のもと、継続的に育む**ことができると考えられます。

## 段階的指導

### 小・中の文字指導

段階的な目標と評価を踏まえた指導については、小・中で行う文字指導を例として考えてみましょう。以下は、手島先生が提案された文字指導のCAN-DOです。

- 0-1. 文字の形がわかる
- 0-2. 文字の名前がわかる
- 1-1. 文字が読める
- 1-2. 文字が書ける
- 2-1. 語が読める
- 2-2. 語が書ける
- 3. 文(sentence)が書ける
- 4. 文章(passage)が書ける

(手島良(2018).『これからの英語の文字指導——書きやすく 読みやすく』研究社)

このCAN-DOを達成するために、小・中で明確に役割分担がされているわけではありません。私の授業観察経験からいえば、ほとんどの小学校では0-1から1-2まで指導されており、学校によっては2-1、2-2まで進んでいます。0-1、0-2は小学校で十分に時間をかけていただくとして、中学校では、小学校から継続して指導する1-1、1-2はもちろんのこと、特に2-1、2-2の指導を急がず、大切にしたいところです。ABCの順番で文字を教えることに加えて、並びが近い・音や形が似ているなど、さまざまな方向からアルファベットになじませる時間が必要です。そうすることで、「**文字の教育**」から「**文字を介した教育**」へと徐々に移行するべきでしょう。

## 意味を考えさせる工夫

言語の形式がもつ意味と、使われる目的、場面、状況を結びつけていくことは、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の指導において非常に大切なことです。

そのためには、例えば音読をする際にも、文字を追うだけの音読で終わらず、さらに発展した活動にする必要があります。**読んでいる文の意味を考えさせる工夫や、読み間違い・言い間違いに気づかせ、自己修正させる補助**をするとよいでしょう。

意味だけでなく意図や感情を考えさせる工夫として、Gesture Readingという手法があります。例えば、教師が“May I help you?”と読み上げると、生徒は自分がそう言っているかのようなジェスチャーだけをします。この活動でジェスチャーと文を結びつけると、ことばの意味だけではなく、状況や感情を考えるようになるため、ことばが生きて働きます。

## 一貫して行う指導

「学びに向かう力、人間性等」は、先述した通り、人間性とメタ学習から成り立っています。この目標をもとにした「主体的に学習に取り組む態度」という評価観点には、観点別学習状況評価を行う「粘り強さ」と「自己調整」、個人内評価を行う「感性、思いやりなど」の3つが含まれます。

ここでは、「粘り強さ」と「自己調整」の2つについて、小・中・高一貫して行う指導の方向性を検討していきます。